

『進学事典 研究号』で自覚を促す

武相高校(神奈川・私立)

スポーツが盛んな高校として知られる私立武相高校。一方で、昨今の社会のグローバル化に対応するため進学にも力を入れ、難関大学への進学を目指す生徒も増えている。1年次から特進コース、進学コース、総合コース(文科クラス・体育クラス)のコース制を導入。職業観育成から徹底した進学補習まで、3年間を通して充実した進路指導を行っている。

ミスマッチ防止のための
体験的なガイダンスや授業

「近年、大学進学に力を入れているものの、専門学校進学や就職など多様な進路先を見据えています。ただし、どんな進路を選ぶにしても自分で考え抜いた末に結論を出せることを重視。学校は生徒が自分で決めたことに対して徹底的にサポートします」と言うのは進路指導部長の岸正則先生。

進路指導では1年生では職業理解や文理選択に力を入れている。特に2月に実施する職業理解ガイダンスは充実。生徒の希望する仕事や業種を調査したうえで、例年25分程度の職業についてできるだけ体験的に学べる機会となっている。また、文理選択の際には、ミスマッチ

チを防ぐのを目的に理科や数学の教員が模擬授業を実施。理系を選択した場合、どのような難易度、どのような雰囲気での授業になるかということをわかりやすく伝えている。

具体的な行動を起こし
スイッチを入れるためのツール

2年生になったら、進学希望者に対しては学部学科を考えるよう促す。ただし一般的に男子はスタートが遅い傾向がある。そこで、各大学の特徴を紹介した『進学事典 研究号』をツールとして使っている。

「1年生でも適性検査を実施していますが、もう一度『進学事典』付属の適性検査を実施。適性検査の結果には学部学科の名前も出てくるため、漠然と進学としか考えていない生徒が具体的に考えるためのスイッチになります」と進路指導部の鈴木和男先生。従来は夏のオープンキャンパス前の学校調べ用の資料として『進学事典』を使っていたが、一歩踏み込んだ活用を決めたのだそう。

「巻末のハガキを使った資料請求も最低1校はやらせています。そういったアクションを起こすことで、何もなかったと言っていた生徒にも何かが出てくるようになりました。適性検査の

結果は面談での話の糸口として使うこともあります。何をしたらいいかわからない生徒、口の重い生徒との面談で役立っています」と鈴木先生。さらに、同校では運動部の活動が盛んなため、オープンキャンパスになかなか参加できない生徒もいる。そういった生徒にはハガキでの資料請求をより積極的に行うよう働きかけているそう。

その後、2回の学部学科に関するガイダンスを経て、生徒は進路を絞り込んでいく。「一度目標が定まると、男子特有のスピード感で伸びていく生徒が多い」と岸先生。レベル別進学補習講座などで目標に向かって力を付けていく。

「やりたいことが見つからない生徒もいる一方、最初から学校名だけ意識している生徒もいます。職業や将来の自分像、学問への興味関心を考えて進路を真剣に考えるように働きかけていきたい」と鈴木先生。岸先生も「絶対に避けたいのはミスマッチ。3年間を通して段階的に進路を考えることで、生徒には自分で将来を選び取ってほしい」と続ける。「なりた未来へと導く」が同校の進路指導のテーマ。すべての生徒が「なりた未来」を見つけれられるよう、今後進路指導に力を入れていく考えだ。

主な進路カリキュラム

1年「職業に関する知識と理解を深める」	
6月～11月	進路適性検査とその事前・事後指導
8月・3月	オープンキャンパス参加
2月	職業理解ガイダンス
2年「自己適性を知り具体的に進路検討」	
7月	大学学習法ガイダンス
8月・3月	オープンキャンパス参加
10月	大学学部理解ガイダンス
1月	大学入試のしくみガイダンス
3月	大学学部学科別ガイダンス
3年「進路実現のための力をつける」	
4月	大学推薦・AO入試ガイダンス
5月	大学・専門学校進学相談会
6月	専門学校決定研究会
8月	オープンキャンパス参加
12月	一般入試出願校決定ガイダンス



進路指導部長
岸 正則先生(右)
進路指導部・2年担任
鈴木和男先生(左)

「やりがい、生きがいを見つけさせるための進路指導に力を入れています」

スクールデータ

1942年創立
普通科
生徒数826人
(男子のみ)
進路状況(2016年3月実績)
大学進学175人、
短大進学5人、
専各進学47人、
就職24人、その他31人

取材・文／永井ミカ